

キタシロサイ、

地球最後のオスが逝く

種が絶滅しても希望まで

絶やしてはならない



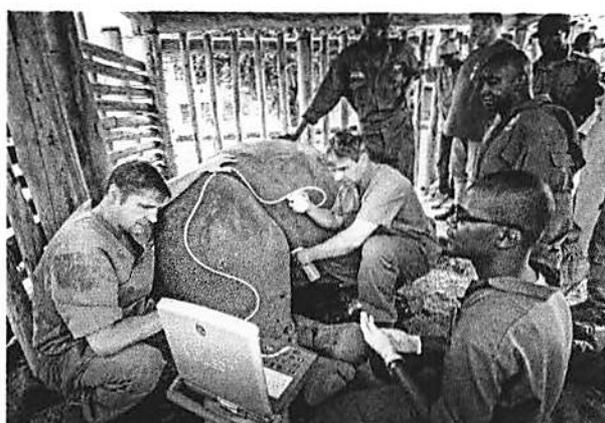
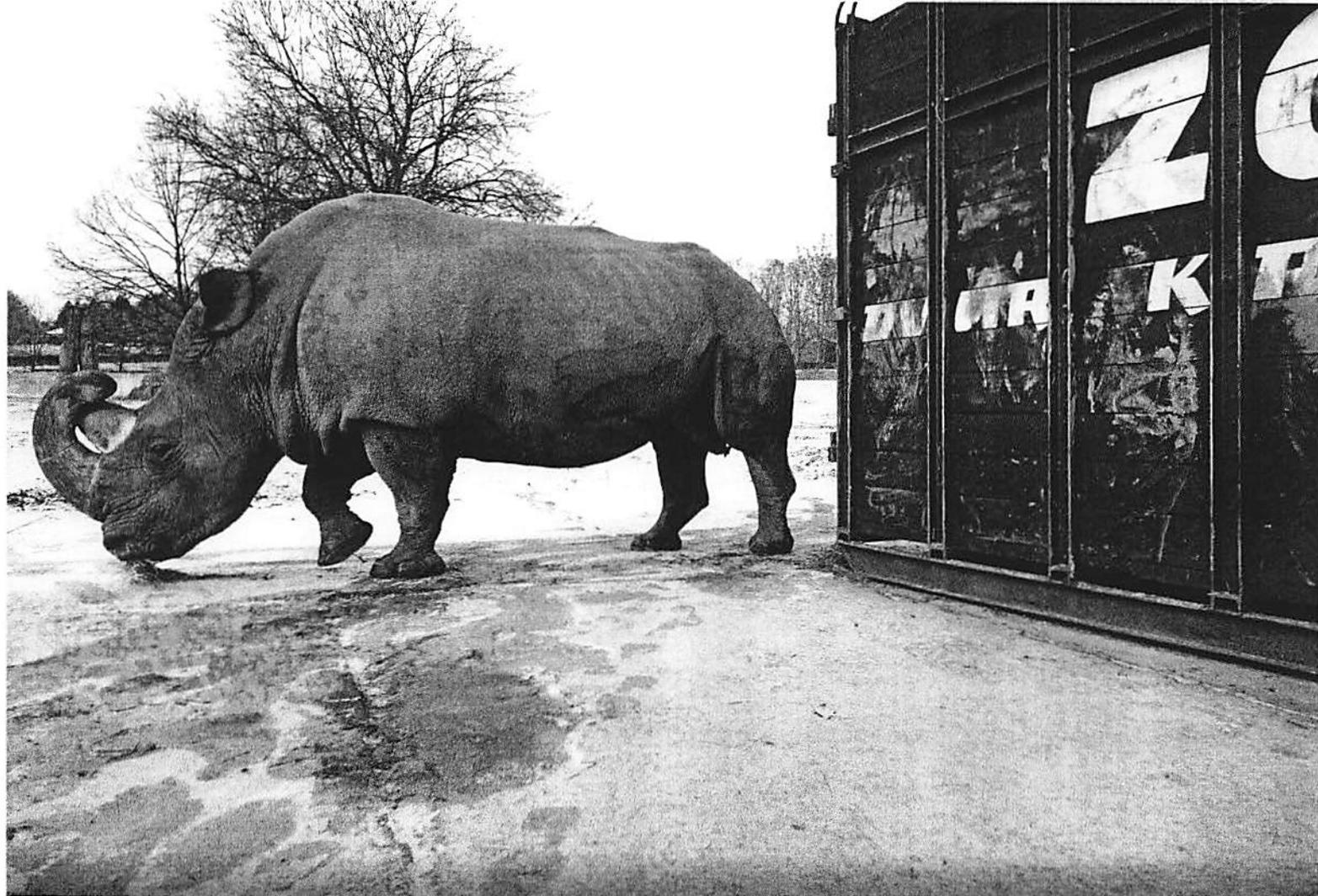
Photos: Ami Vitale  
弱っているスーダンを撫でるレンジャー

## THE WORLD'S LAST MALE NORTHERN WHITE RHINO

絶滅を防ぐために自然交配を願い、チェコの動物園からケニアのサバンナへと移送されたキタシロサイ4頭。

そのうちオスの最後の1頭となったスーダンが、2018年3月に息を引き取った。

米国の写真家アミ・ヴィタルはカメラとともに最期を看取った。



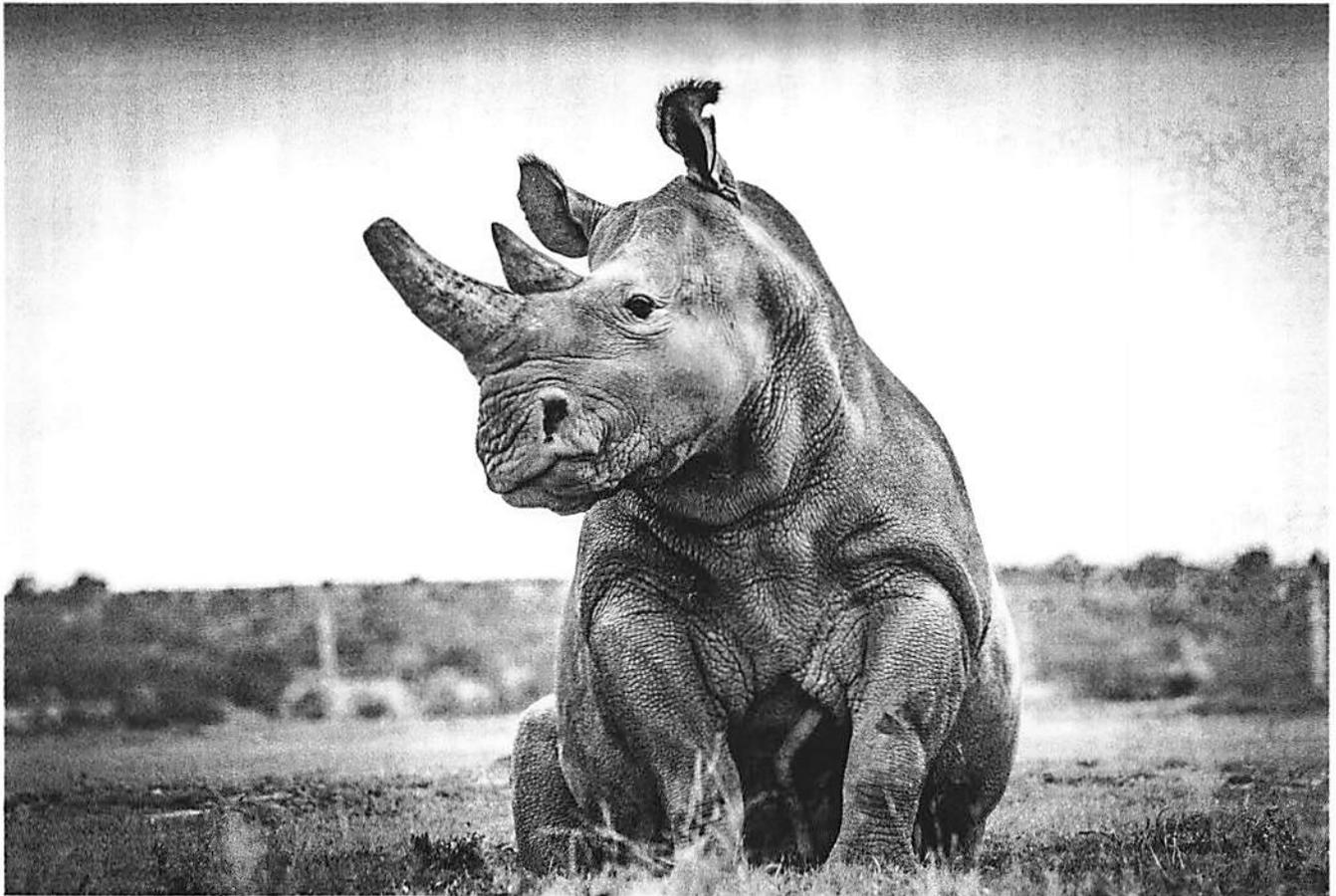
最後に彼は、空を見上げた。  
自然や動物を救うことは  
私たちを救うこと。

10年前、絶滅危惧種のキタシロサイ4頭が、チェコの動物園からケニアへと空中輸送される計画があると聞いた。それはなんだか、捕らわれの身だった動物が荒れ果てた大平原へと帰るディズニー映画の筋書きのように聞こえる。しかし現実には、種を存続させるための最後の苦し紛れの試みだった。

私が初めてこの優しくて巨大な生き物に出合ったのは、工業地帯の煙突と人間たちに囲まれた、雪の降るチェコだった。それは彼らにとってふさわしい環境ではなかったが、そこに長らくいたことが彼らの命を救っていたことになるかもしれない。野生の最後の1頭は、2004年に密猟(※)されたからだ。

スーダンと名づけられたオスとはか3頭は、09年12月の寒い夜に動物園を発ち、ケニアのオルベジエタ保護区へと到着した。サバンナの空気、水、食べ物、そして自由に歩き回れる草原が彼らを刺激し、交配することができるのではないかと専門家たちは考えた。

私はスーダンがアフリカの土壌をもう一度踏んだ時のことをはっきりと覚えていて。土砂降りの雨が降り始めた中、彼は頭を上げて雨の匂いを嗅ぎ、地面で駆け回った。それは1975年、



写真上右/チェコの動物園にて、輸送コンテナに入るスーダン  
 上左/スーダンの孫、メスのファトゥ  
 下右/2016年、ファトゥの卵巣を調べる医師たち。  
 診断の結果、最後のメス2頭はすでに妊娠できない体だということが判明した  
 下中/密猟者から守るレンジャー  
 下左/彼らの主食は草だが、ニンジンやリンゴをおやつとして食べる

アミ・ヴィタルはニコン・アンバサダー、ナショナル・ジオグラフィック・フォトグラファー、ウェブサイトからスーダンの写真を購入すると、密猟阻止などオルベジタ保護区の動物保護活動に全額寄付される。  
[www.amivitale.com](http://www.amivitale.com) (英語のみ)



彼が2歳の時にこの大陸を離れて以来の泥浴だった。

だが、交配計画はうまくはいかず、18年3月末に最後のオスだった45歳のスーダンが老衰で亡くなった。死ぬ直前、スーダンの周りには彼の命を守ってきたレンジャーや飼育員、チェコの動物園からも関係者が集まった。ほとんどの人たちが何日間も泣いていた。最後に私がスーダンの耳に触れると、彼は重い頭を私の方に傾けてくれ、空を見上げた——まるで10年前、この地に着いて、降り注ぐ雨に向かって頭を突き出した時のように。聞こえるのは一羽の鳥が去っていく音だけ。静かな時が流れた。

サイやゾウなど何百万年もこの地球上で生きてきた動物たちが、人類よりも先に絶滅してしまう可能性がある。いま私たちは、人間と自然は切り離すことができないと自覚しなければならぬ。人間は風景や自然の一部を成す存在なのだ気づいた時、自然を救うことは私たちを救うことになるはずだ。スーダンの死は、種の絶滅を意味する(※2)が、希望まで絶えたわけではない。こうやって私たちを、目覚めさせてくれたのだから。

④ (Ami Vitale, The Big Issue Australia)

※1 特に70〜80年代にかけて、中国の漢方薬やイエメンの短剣の持ち手に使われる角を目的に密猟が横行し、野生個体数の減少が加速した。(参照: SAVE THE RHINO)

※2 自然交配はできなくなったが、研究者たちは幹細胞を使った精子の作製や近縁種ミナシロサイとの異種交配などで子孫を残す方法を模索している。